

経済理論の客観性（2）

佐藤 順一

第三節 三世界図式

前節で私が明らかにしたことは、古典力学と基礎的ミクロ経済理論および単純なマクロ経済理論それぞれの論理世界を探究する切り口として客観性を選び取ったこと、であった。この節では、論理世界を探究することを目的とする思考枠組みとして設定した三世界図式を説明する。この説明を通して、前節で強調した対象の所与性をもつ含意を少しばかり鮮明にすることができると思う。

私は、三つの理論それぞれの論理世界を探究するにあたって、三つの世界から構成される場を設定している。第一の世界が、日常生活を送る中で日常生活者が形成する日常世界である。二番目に登場する世界は、この日常世界から理論の素材となる事象を理論構築者が掬い取ることによって構成される現象世界である。理論構築者は分析目的に適合するようにこの現象世界の一部を切り取って分析世界を形成する。これが三番目の世界である。日常世界と分析世界を直結させずに両者の間に現象世界を媒介させたことが、三世界図式の基本的特徴となる。

三世界図式は日常世界と現象世界および分析世界から成っている。一方、私がこの研究ノートで検討課題にした論理世界は現象世界と分析世界および論理整合的理論から構成されている。両者に共通の現象世界と分析世界は理論が違えば異なった内容を持ち、各理論の論理世界はそれぞれ違った問題を抱えることになるだろう。これに対して、日常世界は、全ての理論構築者が直面する世界であり、如何なる理論の構築作業もここから始まる。その意味で、日常世界は全ての理論に共通の基盤である。この点を考慮に入れて、この節では、日常世界に焦点を合わせて議論を展開する。日常世界と日常世界の光に照らし出される現象世界の姿を取り上げ、また、分析世界は日常世界と分断されているが故にある危うさを孕むことにも触れる。

いうまでもなく、三世界図式を十分に説明するためには、認識論上の問題をはじめ多くの論点に触れる必要がある。しかし、本稿では、私の能力不足もあって、いくつかの論点を無視する結果になった。そのため、私の議論には分かりにくい部分が生じているように思う。その上、取り上げた論点はそれにもかかわらず相互に関係しあっているから、私の議論は混乱しているかのような印象を与えてしまうかもしれない。

生じうる混乱をできる限り防ぐために、この節の最初に、私が三世界図式を設定した理由を明らかにする。合わせて、三世界図式の概略を説明し、三世界図式と客観性との関係を確認する。第二に、私の三世界図式が日常世界を出発点としている理由を説明する。この説明は私が理論構築者の視点に沿って議論を行う理由をも明らかにする。私は、私が設定した理論構築者が直面す

ると私が想定している日常世界を前提に議論を行うことになる。ところが、理論構築者が直面する日常世界を設定することは困難な問題を生み出す。この問題に対する私の対処方法を説明することが、この節における三番目の課題である。

三世界図式では、理論構築者が日常世界から現象世界を掬い取る作業が重要な意味をもつ。この作業内容を把握し、その困難を確認することが、第四の課題である。しかし、現象世界を形成する作業を理論構築者が行うものとして説明するのは、実際には観察者としての私である。五番目の課題は、この関係の下で、私が三世界図式に従って作業を進める際に留意しておかなければならない若干の事項を提示しておくことである。最後に、日常世界との直接的関係を切断された分析世界が孕む問題にも簡単に触れておく。

最初に、三世界図式を設定した私の立場を示しておこう。理論構築者が理論を構築するに至る過程は、極めて単純化すれば、次のように整理できると私は考えている。理論構築者は日常世界の中から理論を構築するための素材となる事象をまず選択する。その上で、選択した事象の範囲と内容を明確に把握し、概念化する。その概念から理論を構築するのに必要な要素を取り出し、あるいは不要な要素を捨て去る。こうして純化された概念を論理的に操作することで、論理整合的な理論を構築する。

この一連の過程の中で行われる作業は、相互に関連し、複雑に絡みあっている。しかし、私が関心をもっているのは、制度化された経済理論の論理世界である。そこで、単純化のために、理論が完成するに至るまでの複雑な過程を一切無視し、最初から一筋の道が完成した理論に向かって拓けているかのように想定することにした。

私はこの一本道を二つの旅程に分けて考察しようと思う。最初の旅程は、日常世界を出発地点として、日常世界の中から理論の素材として事象を選択し、その事象の範囲と内容を明確な言葉で言い表すことで構成される現象世界に到達する旅程である。第二の旅程は、現象世界から始まり、理論の素材となる事象を言い表す概念を理論構築に相応しい概念に整理し、分析世界に到着する旅程である。分析世界から先には論理整合的理論に至る旅程が存在するが、本稿では私はこの旅程を一切無視している。以下では、第一の旅程を明確化の過程、第二の旅程を抽象化の過程と名付けることにする。

理論構築者が理論構築を始める出発地点は日常世界である。ところが、日常世界は、理論構築の観点から見ると、厄介な性質をもっている。日常世界は日常生活者が生み出す世界像である。それゆえ、日常世界は日常生活者ごとに異なっている。しかも、この世界像は、曖昧で多義的な言葉で表現され、境界も明確ではない。他方、理論は明確な概念で組み立てられ、考察されている範囲も明確に画定されていなければならない。しかも、その内容は全員に共通のものとして提示される必要がある。日常世界は、理論の素材でありながら、その特徴から見て、論理整合的理論を構築する直接の基盤とするには難があるのである。

論理整合的な理論を構築するためには、日常世界で使用される多様で多義的な言葉を理論で用いられる明確な概念に置き換えることが求められる。この課題を達成する過程が明確化の過程にほかならない。この過程が推し進められる結果として構成される現象世界は、明確な概念から成

り、境界も明確で、しかも全員に共通の世界像となる。日常世界を素材として日常世界とは対極の位置にある現象世界を構成する作業を、私は日常世界から現象世界を掬い取る作業と表現している。

理論構築者は現象世界を構成する概念から不要な要素を捨て去り、必要な要素を取り出して、理論構築に直接利用する概念を形成する。この過程が、概念を純化する抽象化の過程である。理論構築者はこの過程を経て分析世界に到着する。分析世界は、現象世界の一部を切り取ることで形成される世界像であり、理論構築者が理論を構築する直接の基盤となる。

理論の客観性を検討する観点からは、この三世界図式は必ずしも都合よくできてはいないように見える。日常世界は日常生活者が心の中で抱く世界像であるにすぎない。また、現象世界は、理論構築者がその日常世界を明確な境界線で画し、その境界内に存在する事象を意味が明瞭な言葉で言い表すことで成立するのであるから、理論構築者が思考した結果でしかないように思える。思考者の思考とは独立であることをもって客観性と呼ぶという私の用語法に従えば、現象世界は客観的世界ではないと判定される可能性が常にある。さらに、分析世界は、その現象世界を構成する概念から不要な要素を取り去るといった操作を理論構築者が行うことによって形成される世界像である。当然、分析世界も客観的世界とはいえないと判断されても仕方がないだろう。その分析世界を構成する概念を操作して構築される理論も客観的ではありえないと考えられてしまう。

理論構築者は、自分が構築した理論はそれにもかかわらず客観的理論である、と主張している。とすれば、客観性の根拠として頼りになるのは、理論構築者の思考や概念操作ではなく、日常世界の中で生起する事象の所与性であるように思える。理論構築者が理論の素材として選択した事象は、私の用語法に従えば、理論構築者の思考とは独立にその思考以前に存在している限り、客観的存在である。客観的事象を言い表す概念は客観的と呼べる。客観的概念で構成される現象世界も客観的世界である。客観的な現象世界の一部を切り取ることで形成される分析世界も客観的世界である。分析世界を構成する概念を操作することで構築される理論も客観的理論である。こうして、理論の素材が客観的に与えられているとき、理論構築者は客観的な理論を構築したと主張することが可能になる。

古典力学と基礎的ミクロ経済理論および単純なマクロ経済理論は何れも客観的理論であるとそれぞれの理論構築者が主張しているとするならば、これら三つの理論は対象の所与性を前提としているという共通の性質をもっていることになる。この判断が正しければ、各理論における論理世界の違いは、理論の素材となる事象のもつ性質が異なっている点に求められる。素材となる事象の所与性に着目して論理世界を探究する場合には、この相違のうちでも対象の与えられ方の違いに注目すべきだと私は考えている。素材となる対象の与えられ方が異なれば、現象世界は違ったものとなるだろう。現象世界が相違するときは、分析世界も異なるだろう。現象世界と分析世界が理論ごとに違ったものになるならば、論理世界の探究も理論ごとに行われるべきである。

一方、私の三世界図式の下では、すべての理論構築者は日常世界から出発する。全ての理論構築者が日常生活者であるに違いないからである。この当たり前の事実を、暗黙の前提として事実

上無視するのではなく、むしろ議論の出発点に明確に据えようと、私は決意している。日常世界から議論を始めることにはそれなりの意味があるからである。その意味を説明することは、私が理論構築者を登場させた理由をも明らかにすることになるはずである。この点を明確に示すことが本節における第二の課題である。

前節で私は、理論の客観的対象は「与えられる」、と表現しておいた。主語と述語の関係を用いて事態を把握し叙述する知的習慣に従えば、「与えられる」という受動態の文章は、主語が隠されているだけに、不完全にしか事態を叙述していないと思われても仕方がない。少なくとも誰が誰に何を与えるのかが明瞭でないならば、事態は明確に把握されたとはいえないのである。事態を明確に把握するためには能動態を用いて叙述する必要がある。

受動態を能動態に変換するためには、まずは主語を発見しなければならない。本稿のケースで問われているのは、誰が理論構築者に理論の素材となる事象を与えるのか、という問いである。この問いは、理論構築者だけではなく、与えられた事象について思考する全ての思考者に向けられた問いとなることは言うまでもない。

この問いに答えるためには、思考者と思考対象が構成する世界の外部にあって、思考者の思考とは独立に、思考者の思考対象となる事象を思考者に与える存在を見つけなければならない。思考者に与えられる全ての事象は誰かが作り出したに違いないと考えるのであれば、全ての事象を創造し、創造した事象を思考者に与える存在を捜し求める必要がある。この存在を人は時に神と呼ぶのであろう。

私の判断では、対象の創造を巡るこの種の議論は、思考者と思考対象とをともに上からあるいは外側から観察することが可能な者の立場に立つて行われる議論である。行為主体とその行為や状態を上からあるいは世界の外部から眺めればこそ、行為主体を主語として表現し、その行為や状態を述語で表し、かくて事態を主語―述語の関係として叙述することが可能となる。私には、事態を主語―述語の関係を通して叙述しようとするからこそ、思考者に思考対象を与える創造主を創造しなければならないように思われる。

しかし、私は経済理論の論理世界を解明したいのであって、神学には関心をもっていない。それにもかかわらず、能動態への変換がもたらす問題は私の議論の出発点でも確かに存在している。この困難な状態から抜け出すために、私は議論の視点を観察者の視点から行為主体としての理論構築者の視点に転換してみたい。すると焦点は、観察者が主語として設定する万物の創造者から、主体としての理論構築者が与えられた対象を受け止める場としての日常世界に移ることになる。

とはいえ、日常世界を議論の対象に据える知的作業はそれほど簡単ではない。その困難に私がどのように対処するかを説明すること、それが本節で取り扱う三番目の課題となる。まずは、改めて日常世界の特徴を観察者の目線で簡単に整理することから議論を始めておきたい。その中で、観察者としての私が直面する日常世界と私の設定した理論構築者が直面する日常世界との相違も明らかになるだろう。

議論の出発点となる日常世界は、日常生活者の目線を離れて観察者の立場から言えば、日常生

活者が日常生活を送る中で過去及び現在に遭遇したさまざまな事象を素材として日常生活者本人が形成する世界像である。日常生活の中で日常生活者はある事象を重く捉え、別の事象を軽視する。あるいは、時にはある事象には全く気付かず、気付いても完全に無視することもある。こうして、日常生活者は自らの目線で一つの世界像を形成する。

日常世界は、日常生活者が、体験した事象に基づいて、初源においては無自覚にあるいは意図せずに、作り出した世界像である。日常生活者にとって日常世界はまずは環境として現れると言っていいかもしれない。しかも、日常生活者にとっての環境である日常世界の中には、日常世界を形成した当の本人は現れてこない。目は目を見ることはできないからである。その上、日常世界を作り出した当の本人が死亡すれば、作り出された世界像も消滅してしまう。

この日常世界を対象として把握することから私は議論を始めることになる。しかし日常世界は個々の日常生活者にとっては環境として現れるのではなかったか。とすれば、改めて環境としての日常世界を対象として把握することの意味を問うてみなければならぬだろう。さらに、日常世界は個々の日常生活者が形成する世界像であるのだとすれば、日常生活者の数ほど日常世界は存在することになるはずであろう。一体誰の日常世界を私は対象として把握しようとするのであろうか。この問いにも明確に答える必要がある。

私はこれらの問題を、論理的に解決するのではなく、論理世界を解明する目的を実現すべく実践的に乗り越えたいと思う。そこで、私は、問題関心をもって対象を把握しようとする行為をもちだすことにする。この行為を通して私と私が設定した理論構築者の立ち位置を明らかにし、それぞれが直面する日常世界の関係を確認しておきたいのである。

日常生活者が何らかの問題関心をもって日常世界を眺めるとき始めて、日常生活者は日常世界と向き合う。私が日常生活を送る中で本稿のテーマを思い浮べたとき、私の日常世界は、私という日常生活者を取り巻く単なる環境ではなく、少なくともその一部が私の思考対象となる。それに対応して、私は日常世界の中で思考と行為を自覚的に行う主体となる。私に限らず全ての日常生活者は、自分を取り巻く環境にそれなりに違和感をもち、それなりの問題関心をもって日常世界を眺めることがありうるであろう。それゆえ、全ての日常生活者は主体となる可能性をもっているといえる。

主体としての日常生活者は、その思考を通して、思考の対象である日常世界の中に自分が存在することを見て取ることが可能となる。言い換えれば、思考することで始めて、思考する自分が自分の日常世界の中に存在することを自分で確認することができる。同時に、思考する自分が自分を自分の日常世界の中に発見することで、思考する自分は自分の日常世界と自分自身とを同時に観察する立場に立ち、主体を主語として表現する位置を獲得する。私という主体を観察者としての私は「私」という主語として表現することができるようになるのである。これが私の基本的認識である。

環境として現れる日常世界と対峙することで、日常生活者は二つの可能性を手に入れる。可能性の一つは、日常生活を送る中で観察した事象を分析し、理論を構築することである。理論構築者の立場がこれである。もう一つの可能性は、日常世界の中で生起する事象を観察することを通

して、日常生活を送る自分とその自分が形成した日常世界をともに観察することである。観察者の立場である。

日常生活者である私は理論構築者にも観察者にもなりうる。しかし、本稿では、私は理論構築者になることを禁欲している。また、私が設定した理論構築者には観察者になることを禁止しておきたい。私と理論構築者とを明確に異なった立場に置きたいからである。とはいえ、理論構築者は、日常世界と対峙し客観的理論を構築する作業を行う以上、観察者の視点をももつ必要に迫られることがありうるかもしれない。その場合には、私は理論構築者が観察者の視点を取ることが認めなければならないだろう。

理論構築作業を始めるにあたり理論構築者が直面することになる日常世界は、理論構築者を設定した私が直面している日常世界とは別の世界である。私の日常世界には、私が検討対象とした古典力学とミクロ経済学およびマクロ経済学が完成した形で含まれている。これに対して、理論構築者が出発点とする日常世界には、理論構築者が構築することを目指している当該理論は含まれてはいないはずである。

私の日常世界と理論構築者の日常世界が別のものであるのならば、私は理論構築者が直面することになる日常世界を改めて構築しなければならない。日常世界を構築するには、私は、私が直接知ることができる私の日常世界を多分暗黙の素材として何らかの概念を形成し、その概念を操作する作業を行う必要がある。しかし、この作業を通して厳密に構築される世界像は、最初から明確な概念によって構成された世界像となるはずであるから、曖昧さを含まない。

明確な概念によって構成され、曖昧さを含まない世界像は、理論構築者が出発点とすべき日常世界というよりも、日常世界から掬い取られた現象世界と呼ぶほうが相応しい。従って、私が日常世界を構築する作業を厳密な形で行えば、理論構築者は、最初に直面しなければならない日常世界を飛び越えて、私が構成した現象世界からいきなり歩み始めることになる。そのことは、理論構築者が、曖昧な日常世界から明確な現象世界を掬い取るという課題に直面しないで済ましてしまうことを意味する。

私はこの事態を回避したい。私が設定した課題を、私自身ではなく、私が設定した理論構築者に行ってもらいたいと思っているからである。そのためには、理論構築者が理論構築作業を行うときに直面することになる日常世界を構築する私の作業を最小限の範囲にとどめ、理論構築者が直面する日常世界を敢えて曖昧なままに残すことが必要であろう。

理論構築者が理論構築作業を始めるにあたり直面すると私が想定している日常世界について私が説明できることは、以下の二点にとどまる。第一に、理論構築者が直面する日常世界には、当の理論構築者が構築することを目指している理論は存在していないが、理論構築の素材となる事象は全て含まれている。しかし、その素材が何であるかについては、少なくとも最初から列記することは避けておきたい。日常世界の曖昧さを残すためである。

第二に、理論構築者は何らかの問題関心に従って素材を選択するのであるから、理論が異なれば、理論構築者が直面する日常世界に私が含めなければならない事象も違ってくる。しかし、私は全ての理論構築者は同じ日常世界に直面しているものと想定している。理論構築者の日常世界

には、本稿で検討対象とした理論の素材となる事象が全て含まれている。現象世界に相違が生じるのは、問題関心が理論構築者によって違っているために、理論構築者が選択する事象が異なってくるからなのである。

理論構築者が直面すると私が想定した日常世界は、私が直面する日常世界と変わらない特徴ももっている。理論構築者の日常世界も客観的ではなく、万人に共通するわけでもなく、境界は曖昧で、恒久的に存在することもない。この日常世界も、論理整合的理論を組み立てるときに前提とすべき世界とは対極の位置にある。理論構築者は、論理整合的な理論を構築する第一歩として、日常世界から出発して日常世界とは対極的な現象世界を構築しなければならない。この作業の内容を把握し、その困難を確認しておくこと、それがこの節で私が果たさなければならない四番目の課題となる。

既に説明しているように、理論構築者が日常世界から現象世界を掬い取るためには、基本的に次の作業を行う必要がある。まず、理論構築者は自分の問題関心に従って理論構築の素材となる事象を選択する。次に、選択した事象の内容を明確な意味をもつ言葉で表現し、概念化する。また、その概念が適用できる範囲を確定する。こうして明確な境界で仕切られた現象世界が構成される。

しかし、日常世界は曖昧で複雑な世界であり、現象世界を掬い取る作業を自覚的に行おうとすれば、理論構築者は多くの困難に直面することになる。この困難を説明することは、掬い取るという聞きなれない用語を私が用いた理由を窺わせることになるだろう。ここでは、私は、理論構築者が行うべき作業を一般論として論理的に明確化する代わりに、経済理論の論理世界を解明するという課題にかかわらせて私の考え方を展開する。その際、私は、理論構築者が日常世界から現象世界を掬い取る作業を理論の素材を選択する段階と選択した素材を概念化する段階の二つに分けて、それぞれの段階が抱える問題を整理する。

まず、素材選択の段階を取り上げる。この研究ノートでは、私は、理論構築者の問題関心を与えられたものとして扱い、専ら選択の対象に関心を向けている。理論構築者は、自分の問題関心に沿って、日常世界で生起する事象の中から特定の事象を理論の素材として選択する。その事象が、思考とは独立に与えられた事象であれば、構築した理論は客観的でありうることになる。

しかし、理論構築者の作業を観察者の視点から見れば、ここには重大な問題が潜んでいる。理論構築者が選択した事象が確かにしかも客観的に存在していることを理論構築者自身がどのようにして確認できるのか、という問題である。ある事象が確かにしかも客観的に存在していると理論構築者が判断するにあたっては、理論構築者は何らかの判断基準を必要とはしないのだろうか。もしその判断基準を自分が定めるのだとすれば、自分の思考結果に従って選択された事象は客観的であるとはいえないだろう。

あるいは、その判断基準が当の理論構築者以外の誰かが作成したことも考えられる。理論構築者の立場から見れば、その判断基準は自分の思考結果とは独立に与えられたものであるから、理論構築者が選択した事象をその判断基準に従って客観的であると当の理論構築者が判断することには何の問題もないかのように思われるかもしれない。しかし、当の理論構築者は判断基準を作

成した他者の思考が正しいと思考したのであるから、自分の思考とは独立に事象を選択したのではないことになる。少なくとも、観察者はこのように考えるであろう。

ここからは、二つの問題が浮かびあがってくる。一つは、与えられた事象を理論構築者が客観的であると判断することには困難が伴うかもしれないという問題である。この困難の内容や程度は事象の与えられ方によって異なるだろう。これが私の判断である。第四節以降の議論はこの点を踏まえる必要がある。

二番目の問題は、客観性の判断を巡って理論構築者と観察者の間にはズレが生じる可能性があるという問題である。客観性という言葉は思考からは独立という意味で用いる場合、その思考は誰の思考であるのだろうか。理論構築者は他者の思考結果を自分の思考とは独立に与えられたものであると判断するかもしれない。一方、観察者の立場からは、理論構築者以外の思考者の思考も思考に他ならない。それゆえ、いずれの思考からも独立でない限り、客観的とは呼べないことになる。この問題については、特に第五節以降で取り上げることになるだろう。

現象世界を構成する第二段階に話を進めよう。現象世界を構成するには、事象を言葉で表現することが不可欠である。ところが、日常世界が曖昧で人によって異なっていることに対応して、日常生活の中で用いられる言葉も曖昧で多義的である。同じ事象が人によっては異なった言葉で言い表されたり、同じ言葉が違う事象を表現するのに用いられたりする。現象世界を鮮明に描き出すためには、同一の事象を同一の言葉で言い表し、その言葉の意味を明確に定めておく必要がある。日常生活で用いられている日常語を専門語つまりは概念に置き換えなければならないのである。

さらに、日常語には、日常生活者それぞれが抱く好悪の感情が付きまとい、あるいは善悪・美醜について異なった判断が伴う。この感情や判断を、適切な言葉とはいえないが、個人的思惟と呼んでおこう。この個人的思惟は、与えられた事象の属性であるのではない。むしろ理論構築者が選択した事象の属性に対して日常生活者としての理論構築者が与えた評価である。従って、客観的に与えられた事象の属性を明確に把握するためには、理論構築者は自分が与えたあるいは自分以外の日常生活者が与えたと思われる個人的思惟をも排除しなければならない。そうしてこそ、客観的理論を構築することが可能となる。

こうして形成された専門語は二重の意味で客観的な概念を言い表している。一つは、理論構築者が選択した事象が理論構築者の思考とは独立に理論構築者の思考以前に与えられているという意味である。もう一つは理論構築者を含む日常生活者の個人的思惟とは独立の属性をもつという意味である。

一切の思考とは独立に理論構築者に与えられる事象の属性は、他の誰に対しても一切の思考と独立に与えられうる。全ての日常生活者に与えられる事象の属性はあまねく存在している事象に共通の属性であり、この事象の属性を表現した概念は全ての日常生活者にとって共通の内容をもつものとして全ての日常生活者に承認されうる。二重の意味で客観的概念はまた存在と認知の両面で普遍的な概念でありうるのである。

客観的で普遍的な概念によって構成される現象世界は、客観的で普遍的世界である。この世界

は、それぞれの日常生活者に共通の部分であり、それぞれの日常生活の外部から与えられた世界である。この世界は、理論構築者を含む全ての日常生活者とは独立に存在している世界であるかのように全ての日常生活者の眼前に現れる。理論構築者は日常世界の中からこの現象世界を掬い取るのである。

ところで、本稿の中では、事象を選択し概念化して現象世界を構成するのは、私が設定した理論構築者である。一方、この過程を説明しているのは、理論構築者を設定したこの私である。理論構築者と私は立場を異にしているから、現象世界の構成を次節以降で具体的に論じる段階で私はいくつかの点に留意しなければならない。ここでは、方法や論点の限界を巡って自戒すべき点を予め四点に整理しておく。これが本節における五番目の課題である。

既に説明したように、理論構築者が直面する日常世界には、理論構築者がこれから構築しようとしている理論は含まれていない。しかし、私が検討の対象としている理論は私の日常世界には含まれているから、私がある影響を受けている可能性は大きい。理論構築者が現象世界を構成するに至る過程を私が説明するときには、できる限りこの影響を排除するべきであるだろう。これが第一の留意事項である。この点は第五節で一つの困難として現れてくることを私は覚悟している。

第二に、私が設定した理論構築者は理論構築を行う当事者の立場に立ち、理論構築者を設定した私は観察者の立場を取っている。しかも、先に見たように、理論構築者と観察者とは客観性を巡って判断にズレが生じる可能性がある。理論構築者が直面する困難を直視しようとするならば、観察者の立場に立つ私は、理論構築者の判断と観察者の判断とを取り違えてはならないだろう。

観察者の私が直面する日常世界は日々変化している。しかし、理論構築者が直面する日常世界を想定するにあたっては、私はこの歴史的推移を無視している。これが第三の留意事項となる。一般に、日常世界が変化すれば、理論構築者の問題関心も変化するだろう。日常世界の歴史的推移を無視することは、問題関心を与えられたものとして扱っている私の立場と整合的ではある。しかし、歴史的推移を無視することで、私は理論構築者が抱く問題関心の歴史的背景を視野から追い出すことになる。

さらに、歴史的推移を無視することで、日常生活を送る私は、歴史的推移にさらされている私自身の日常生活からは超然とした立場に身をおくことになり、検討対象とした理論が歴史の中で果たす役割や効果に向ける関心を弱めることになる。確かに経済理論は歴史貫通的メカニズムに関心を寄せているが、他方では現実的な効果が問われてもいる。歴史貫通的メカニズムと現実的效果との間に生じるはずの緊張関係は、論理世界を迫及する私の議論からは抜け落ちていく。

第四の留意事項は、私が理論構築者による現象世界の構成を説明するにあたり、善悪の判断などの個人的思惟を概念形成から排除した点である。個人的思惟の少なくとも一部は、単に個人の問題であるにとどまらず、社会的性質を帯びている。例として善悪等の判断あるいはその背後にある信仰などを思い浮べることは容易であろう。これらを個人の問題として議論から排除することは、経済理論における論理世界の迫及を論理の世界に閉じ込める結果をもたらすことになるだ

ろう。

現象世界の形成は分析世界へと続く。本節の最後に、論理世界を形成する第二の旅程にも問題が存在することを確認しておく。私の三世界図式の下では、日常世界と分析世界の間現象世界が介在している。現象世界は日常世界と分析世界を切り離しているとも言える。日常世界との直接的関係を切断されているがゆえに、分析世界には特有の問題が発生する。

分析世界は、理論構築者が論理整合的理論を構築するという目的に合わせて概念を純化することで形成される。分析世界は、日常世界という基盤とは切り離された状態で、論理整合性の要請に引きずられて形成されることになりやすい。とすれば、分析世界は目的を実現するために都合よく形成された虚構の世界になってしまう可能性を孕むのではないだろうか。この問題は特に第五節で取り上げることになる。

次節以降では、現象世界と分析世界が抱える問題を古典力学と基礎的ミクロ経済理論および単純なマクロ経済理論それぞれに分けて検討し、論理世界がもつ特徴や問題点を理論ごとに明らかにしていく。